

平成 29 年度 FD 推進活動報告書

◆ はじめに

南九州大学の FD 推進委員会は平成 21 年度に活動がスタートし、平成 29 年度で 9 年目となりました。この 9 年間で、FD 推進委員会委員をはじめ、大学教員・職員の皆様方のご理解・ご協力のもと、数々の事業を実施することができました。

中でも、前期・後期授業評価アンケート、教員の授業参観及び FD 講演会については定着してきており、FD 推進活動の大きな柱になっております。

平成 24 年度からは学生の魅力度・満足度の観点から点検・評価するためのシステム作りとして「新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査」を実施しています。今年度は平成 24 年度以降行った「新入生魅力度調査」、「卒業生満足度調査」のうち、平成 24 年度および平成 25 年度の新入生魅力度調査を実施した学生における平成 27 年度および平成 28 年度卒業予定者満足度調査のデータを活用し、入学時の魅力度と卒業時の満足度のギャップを集約・整理しました。本事業開始以来初めて、前後比較が可能となり、今後の取組みに対する貴重な資料を得ることができました。

また、平成 25 年度からは FD の情報公開活動を開始しており、年度を重ねる毎に FD 推進のための活動が充実してきております。

昨年度からの取組みとして、南九州短期大学 FD 推進委員会および南九州学園 SD 推進委員会との情報共有や連携強化が開始されました。今年度より SD 義務化が実施され、本学園の FD・SD 推進活動は、大学・短大の FD 活動、教職員一体となった SD 活動そしてそれらを統括する SD 推進会議と組織化され、推進されることとなりました。今年度の連携事業として、FD 講演会を SD 推進会議との共催として実施しました。

以上、今年度はそれぞれの活動について発展的な取組みもありましたが、課題や改善すべき点もあり、さらに充実させるため継続的な検討と取組みが必要です。また、SD 推進会議の組織化による統括的な取組みはまだ始まったばかりで、今後の事業連携が求められているところです。

本報告書は、平成 29 年度に行った南九州大学 FD 推進活動事業をとりまとめて公開し、学内外に向けた情報提供の一端として作成しました。今後の SD 推進会議における FD 推進活動の充実・発展のために積極的に活用いただければ幸いです。

最後に、平成 29 年度の本学 FD 推進活動にご理解をいただき、さまざまな実施事業にご参加いただいた FD 推進委員とすべての教職員の皆様に心より感謝申し上げます。また、本報告書の作成をご担当いただいた各学科・センター・事務局の教職員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成 30 年 3 月

平成 29 年度南九州大学 FD 推進委員会
委員長 渡邊純子

平成 29 年度 南九州大学 FD 推進委員会委員

(部門内五十音順)

環境園芸学科	管理栄養学科	食品開発科学科	子ども教育学科	教養・教職センター
姜 暲求	川北 久美子	中瀬 昌之	財部 盛久	スモール・ブライアン
杉田 亘	渡邊 純子	矢野原 泰士	谷村 佳則	

大学院	事務局（宮崎）	事務局（都城）
中瀬 昌之	赤木 裕美	日高 千絵
	飯原 薫	水淵 美香
	小林 明子	

◆ FD 推進委員会開催報告

平成 29 年度は、下記のように 7 回の FD 推進委員会を開催しました。会場はすべて以下のとおり。

宮崎キャンパス：本館 2 階応接室，都城キャンパス：本館 1 階多目的会議室（TV 会議）

第 1 回 FD 推進委員会

日 程： 平成 29 年 5 月 10 日（水）

時 間： 16：30 ～ 17：00

出席者： [宮崎] 7 名 [都城] 5 名

欠 席： [宮崎] なし [都城] 2 名

審議事項：

- 1) 平成 29 年度委員長の選出について

報告・連絡事項

- 1) 平成 29 年度事業計画及び予算ヒヤリングの結果について
- 2) その他
 - ① 平成 28 年度 FD 活動報告書について
 - ② FD 活動の情報収集
 - ③ FD・SD 担当理事について

第 2 回 FD 推進委員会

日 程： 平成 29 年 6 月 14 日（水）

時 間： 16：30 ～ 17：15

出席者： [宮崎] 7 名 [都城] 5 名 オブザーバー 3 名

欠 席： [宮崎] なし [都城] 2 名

審議事項：

- 1) 本年度の FD 推進委員会の進め方について
- 2) FD・SD 担当理事からの報告
- 3) 本年度の事業計画について
- 4) 前期授業評価アンケートについて
- 5) 新入生魅力度調査及び卒業予定者満足度調査の実施について
- 6) FD 講演会の実施について
- 7) 各学科独自の FD 活動の実施について

報告・連絡事項

- 1) その他

第 3 回 FD 推進委員会

日 程： 平成29年7月12日（水）
時 間： 16:30 ～ 17:15
出席者： [宮崎] 6名 [都城] 6名
欠 席： [宮崎] 1名 [都城] 1名

審議事項：

- 1) FD 講演会の実施について（その2）
- 2) FD 活動の情報収集について（その2）
- 3) 前期授業評価アンケート、新入生魅力度調査の実施について（実施状況確認）
- 4) その他

報告・連絡事項

- 1) その他

第4回 FD推進委員会

日 程： 平成29年9月6日（水）
時 間： 16:30 ～ 16:58
出席者： [宮崎] 5名 [都城] 3名
欠 席： [宮崎] 3名 [都城] 3名

審議事項：

- 1) FD 講演会の実施について（その3）
- 2) FD 活動の情報収集について（その3）
- 3) その他

報告・連絡事項

- 1) その他

第5回 FD推進委員会

日 程： 平成29年10月4日（水）
時 間： 16:30 ～ 18:15
出席者： [宮崎] 7名 [都城] 5名 オブザーバー：寺原学長
欠 席： [宮崎] なし [都城] 2名

審議事項：

- 1) FD 研修会の実施報告について
- 2) 教学改革マネジメントにおけるFD推進委員会の役割について」（寺原学長）
- 3) 後期授業評価アンケートの実施について（学部生+大学院生）
- 4) 卒業予定者満足度調査の実施について
- 5) 後期授業参観の実施について

- 6) 平成 30 年度事業計画及び予算計画作成について
- 7) FD 活動の情報収集について
- 8) その他

報告・連絡事項

- 1) その他

第 6 回 FD 推進委員会

日 程： 平成 29 年 12 月 6 日（水）

時 間： 16:30 ～ 17:10

出席者： [宮崎] 7 名 [都城] 5 名

欠 席： [宮崎] なし [都城] 2 名

審議事項：

- 1) 後期授業評価アンケートの実施について（再確認）
- 2) 卒業予定者満足度調査の実施について（実施状況確認）
- 3) 後期授業参観の実施について（再確認）
- 4) 平成 30 年度事業計画及び予算計画作成について
- 5) FD 活動の情報収集について（その 4）
- 6) その他

報告・連絡事項

- 1) その他

第 7 回 FD 推進委員会

日 程： 平成 30 年 2 月 14 日（水）

時 間： 16:30 ～ 17:30

出席者： [宮崎] 6 名 [都城] 5 名

欠 席： [宮崎] 1 名 [都城] 2 名

審議事項：

- 1) 後期授業評価アンケートの集計結果について（学部生＋大学院生）
- 2) 卒業予定者満足度調査の集計結果について
- 3) 新入生魅力度調査および卒業予定者満足度調査に関する学科等での検討結果について
- 4) 後期授業参観の実績について
- 5) 平成 30 年度事業計画及び予算計画作成およびヒヤリングについて
- 6) 平成 29 年度 FD 活動報告書の作成について
- 7) FD 活動の情報収集について（その 5）
- 8) その他

報告・連絡事項

1) その他

今年度の活動を振り返っての意見や感想を各委員よりだしてもらった。

◆ FD 推進活動一覧

平成 29 年度に実施した南九州大学の FD 推進活動の概要を下記に記述します。

事業【1】 授業評価アンケートの実施（前期・後期）

教育目的の達成状況を点検・評価するとともに、教員の授業の教授法改善や学生の授業に対する満足度の把握等を目的として、例年と同様に継続して実施した。アンケートにおいては学生自身の受講姿勢、及び授業に対する 5 段階評価の確認とともに自由意見欄を設け、授業の良い点、改善を求める点等を求めている。授業評価アンケートは集計後、結果は各教員に開示し、各教員は結果に基づく授業改善報告書を作成し提出した。また学科別にアンケート集計を行い、学科別にも分析を行った。アンケートで得られた各教員個人および学科の問題点・改善点は今後の教育活動に活用する。

事業【2】 授業参観の実施（後期）

授業評価アンケートと同様に教員の教授法改善等を目的として毎年行っている。平成 29 年度も、より一層多くの教職員に参観を求めるため、実施対象期間を長くする等工夫したが、参観対象の授業が同じ日時に重なったり、FD 推進委員のほか限られた教員のみ参加になったりして、総参加数は前年度に次ぐ結果となった。平成 27 年度の参加実績：20 名、平成 28 年度の参加実績：44 名、今年度の参加実績：40 名であった。授業参観後に提出されるアンケートは担当教員と FD 推進委員で共有し、各学科の活動に反映させることとした。

この事業の目的を達成するためには、より多くの教職員に参観いただくことが重要であるため、今後の対策として、授業参観期間を十分確保する・授業担当教員が実施する期間中のすべての授業を参観可能とするなどの意見もでたが、これらを含め、次年度への課題として引き継ぎ、今後さらなる改善を進める。

事業【3】 FD 講演会の実施

教員の FD 推進活動に対する理解および FD 活動の推進を目的として平成 22 年度から行っている。平成 29 年度は、教員の教育力向上に役立つ実践的な知識とスキルを習得する機会として、FD 研修会を実施した。開発教育協会（DEAR）八木亜紀子事業主任を講師としてお招きし、参加体験型の「アクティブ・ラーニング ファシリテーション研修」を指導していただいた。研修会に先立って、教員のアクティブ・ラーニングへの取り組みや教育上の悩みや困難さなどについて現状調査を行い、その結果に基づき研修内容を打ち合わせた上で実施した。「ブレインストーミング」や「部屋の四隅（アンケート法）」などの体験を通して、参加いただいた教職員には充実した研修会となった。

事業【4】 各学科独自の FD 活動の実施

各学科においても全学的な事業同様に、学科独自の特色ある FD 活動を本年度も活発に行った。

事業【5】 新入生魅力度評価アンケートおよび卒業予定者満足度評価アンケートの実施

本調査は、平成 24 年度から導入され、魅力ある大学づくりのための情報を収集するために実施している。今年度は平成 24 年度以降行った「新入生魅力度調査」、「卒業生満足度調査」のうち、平成 24 年度および平成 25 年度の新入生魅力度調査を実施した学生における平成 27 年度および平成 28 年度卒業予定者満足度調査の 2 年間のデータを活用し、入学時の魅力度と卒業時の満足度のギャップを集約・整理した。その結果をもとに全学および各学科において、特に満足度評価が有意に下がっている項目について、今後の対策を検討してもらった。また他項目についても検討をお願いした。本事業開始以来初めて、前後比較が可能となり、今後の取組みに対する貴重な資料を得ることができた。

本事業で得られた成果は、各学科における教育活動および研究活動のみならず、広報活動や学園の運営の方向性を考えるための参考とする。

事業【6】 他大学等の FD 推進活動の情報収集と FD フォーラム等への参加

他大学から寄せられる FD 活動に係る情報の共有化を図るため、年間 7 回実施した FD 推進委員会において、FD 活動に関連する情報や他大学主催の FD 研修会やフォーラム等を紹介し、必要に応じて各委員を通じ、各学科・センター・大学院に周知したり、研修会等への参加を募った。これらの事業については、情報の早い段階での共有が十分でない場合もあったことから、今後は以下も参考に早期の情報提供と共有ができるよう、さらなる工夫が必要である。

- ・各学科・センターにおいて、分野が近い他大学の FD 推進活動をそれぞれが調査し、優れた FD 推進活動の情報を FD 推進委員会を通じて提供する。
- ・情報の共有方法は、情報の入手後すぐに FD 推進委員全員と FD・SD 担当理事、短大 FD 推進委員長、学園 SD 推進委員長に対して、PDF 化した入手資料を E-mail を利用して配信を行う。その後の FD 推進委員会でも入手情報の確認を行う。
- ・SD 推進会議との定期的な情報交換による情報収集

事業【7】 FD 活動の情報公開の検討

他大学では、FD 推進活動をホームページ上や印刷物で紹介しており、「FD 推進活動の公開」が進んでいる。本学においても「FD 推進活動の公開」について引き続き大学ホームページ上で情報公開を行う。

事業【8】 FD 活動報告書（本報告書）の作成

平成 29 年度に行った FD 活動を記録するために報告書を作成した。報告書は事業の詳細のみならず、課題や反省点も記録することで、次年度以降の FD 推進活動等に役立てていく。

事業【9】 本学のSD推進会議との連携

今年度よりSD推進会議が発足し、FD推進委員会もその組織下で活動することになった。SD推進に貢献する取組みとして、教職員合同の研修会実施について提案をしたり、情報共有に努めた。また、9月に実施したFD研修会はSD推進会議と共催で実施した。今後もSD推進会議の動向に合わせ、FD独自の事業を発展させつつ、協調して取組んでいくことが重要である。

事業【10】 『平成29年度 南九州大学FD活動報告書』の作成

平成29年度1年間の南九州大学FD推進委員会の活動実績を報告書としてまとめた。平成30年4月27日に完成した。

◆ 授業評価アンケート報告

平成 29 年度においても、教員の教授法改善や授業に対する満足度の把握等を目的とした「授業評価アンケート（前期・後期）」を実施した。各学科のアンケートの実施結果は以下のとおりである。

授業評価アンケート実施要領

【目的】

教員の授業の教授法改善や学生の授業に対する満足度の把握等を目的として実施する。

【対象】

専任教員が担当する授業で、原則として 1 教員 1 授業とする。2 授業以上でも可とするが、2 授業目以降のアンケート集計は教員が行う。なお、非常勤講師については希望者のみ行うこととする。

【実施時期】

前期は 7 月 11 日（月）～7 月 15 日（金）間に、また後期は 12 月 6 日（火）～12 月 12 日（月）の間に実施することを原則とする。

但し、この期間に実施できない場合は多少前後しても構わない。

【使用するアンケート用紙及び授業改善報告書様式】

別に示す。

【実施要領】

- (1) 学生支援課より、各教員に「実施する授業名」及び「アンケート実施時間（授業前か後か）」を案内する。各教員は学生支援課が指定する期日までに授業名及び実施時間を回答する。
- (2) 学生支援課員は、事前に受講学生分のアンケート用紙を準備する。
- (3) アンケート実施当日、学生支援課員はアンケート用紙を授業時間（授業開始後又は終了前）に配付し、教員はアンケートの目的等について学生に説明を行う。説明した後、教員は教室から退出する。
- (4) 学生支援課員は対象科目の授業時間（授業開始後又は終了前）に待機し、アンケート終了後に回答用紙を回収する。なお、都城キャンパスは学生支援課員少ないため、他部署職員も担当する。
- (5) アンケートは 7 月～8 月中に集計が行われる。学生支援課を通じて各教員へ報告が行われる。各教員は集計結果・自由記述欄の結果をもとに授業改善報告書を作成し、FD 推進委員長へ報告書を提出する。作成された授業改善報告書は今年度後期及び次年度前期の授業開始時に各教員へ返送され、各教員は授業の問題点を認識して問題点を意識した授業を行ってもらうこととする。

【その他】

- ・自由記述欄をフォーマットのままで実施す場合は、アンケート用紙は学生支援課で準備し、回収担当者が実施時期に持参する。
- ・自由記述欄は学科や教員単位で設定可能とする。独自にオリジナルなものを作成する場合は、その旨を学生支援課に連絡しておく。アンケート用紙は各自で印刷してもらう。（各学科あるいは各教員で特徴あるアンケートが実施できるよう積極的に自由記述欄を活用していただきたい）

・教員が担当する科目をすべて行う場合は実施しても問題ないが、その科目の集計作業は実施する教員が行う。

【アンケート結果の学生への公開について】

アンケート結果の学生への公開については、集計後に掲示板にて公開することとする。

【アンケートの集計】

アンケートの集計は外部に委託する。

平成 29 年度授業評価アンケートの結果と評価については、以下をご参照ください。

添付資料 平成 29 年度授業評価アンケート（前期・後期）

◆ 後期授業参観報告

平成 29 年度においても、教員の授業の教授法改善等を目的として、後期に参観授業を実施した。
実施要領を以下に示す。

後期授業参観実施要領

【目的】

教員の授業の教授法改善等を目的として実施する。

【対象授業】

別に「参観授業対象一覧」を示す。

【実施手順】

- ・実施期間内にて対象授業の参観を実施する。
- ・参観者は教室内で対象授業の参観を行い、参観レポート（添付資料）を記入する。（当該レポートの様式は、後日メールにて配布する。参観を希望する教員は自身で印刷して参観に参加する。（印刷されたものも、後日配布予定の当該事業のチラシに添付する予定にしている））
- ・参観は業務等の関係もあるので教員への参加強制はしないが、できるだけ多くの教員に参加してもらおう。
- ・参観レポートは、各キャンパスの「学生支援課」窓口へ提出する。取りまとめ後に参観授業の担当教員へ渡す。

後期授業参観については、以下をご参照ください。

資料添付：後期授業参観一覧および授業参観結果

◆ FD 講演会報告

FD 推進委員会では、平成 22 年度から教員の FD 活動に対する理解及び FD 活動の推進のため、FD 講演会を実施している。平成 29 年度においては下記の要領で研修会を開催した。

平成 29 年度 南九州大学 FD 研修会

日時： 2016 年 9 月 19 日（火）13:00～15:00（2 時間）
会場： 宮崎キャンパス+都城キャンパス(テレビ会議方式)
講師： 八木亜紀子氏（開発教育協会 DEAR 事業主任：東京）
演題： アクティブ・ラーニング ファシリテーション研修
（参加体験型研修会）
主催： 南九州大学 FD 推進委員会
共催： 南九州大学 SD 推進会議

■目的

- 先生方の抱えている課題を共有する。
- アクティブ・ラーニングについての理解・体験。
- アクティブ・ラーニングをすすめるファシリテーター（進行役）の知識・態度・技能を学ぶ。
- 多様な学習方法、学生への働きかけの方法を学ぶ。

■プログラム

- 13:00～13:05（5 分） ①オープニング（講師自己紹介・進行内容の説明・参加のルール紹介）
- 13:05～13:25（20 分） ②部屋の四隅（アンケート）
質問ごとに、参加者は部屋の 4 隅に設置した答えのうち該当する場所（yes/no/どちらかといえば yes/no）に移動する。各コーナーから 1～2 名にインタビューして理由を答えてもらう。
- 13:25～13:30（5 分） ③グループ内で自己紹介（1 人 1 分程度で）
- 13:30～13:40（10 分） ④事前アンケート結果の共有
- 13:40～14:25（45 分） ⑤ブレインストーミング（テーマ：「学びやすい環境づくり」について）
- 14:25～14:40（15 分） ⑥ミニレクチャーと質疑
- 14:40～14:55（15 分） ⑦ふりかえり（3 人グループで 3 分×3 ラウンド／質問は 1 回）
- 14:55～15:00（5 分） ⑧まとめ、終了

■進め方：講義形式ではない。都城キャンパスは TV 会議方式により実施。

- 事前のアンケート等を参考に、現在先生方が抱えている課題を共有する。
- プログラムや手法を実際に体験してもらいながら、プログラムの目的、内容、実施する際のヒントを説明する。
- グループワークの中でグループファシリテーションも経験してもらう。
- 教室の形：グループワークができるよう 4～5 人グループを必要数設置。

■講師

八木亜紀子（開発教育協会 DEAR 事業主任）

DEAR は「開発教育」を推進するための NGO で、国際的な活動から国内の参加学習型のプログラム開発も担っている機関である。八木氏は開発教育活動のほか、地域や学校などでの「学びの場」づくりを指導・支援したり、アクティブ・ラーニングに関連する教材や書籍の開発にも力を注いでいる。

概要

アクティブ・ラーニングは 2012 年中教審の答申を受けて教育に取り入れられるようになった教授・学習の総称である。講義中心の一方向的教授法から学習者の主体的学びを引き出すために、学生と教員の双方が主体的に関わり合い、対話していく教育スタイルが重要となる。そのためには、教員自身がファシリテーターであり、コーチであることを自覚する必要がある。このような教育パラダイムの大きな転換期にあたり、学生の「能動的学習」「積極的学習」「主体的学習」を促すための教育法を、実際に参加し体験できるプログラムとした。参加者はグループに分かれ、講師の話を聞きながら、まるで自分自身が学生になった気分です実際にアクティブ・ラーニングの手法を学ぶことができた。研修会参加者は 37 名、アンケート提出者は 28 名であった。参加後のアンケートでは約 9 割の教員がおおむね満足した、約 8 割の教員が理解できたという結果であった。開催時期はおおむねこの時期で良いという意見が多かった。

表 部門別参加者数

環境園芸学科	10 人
管理栄養学科	7 人
食品開発科学科	5 人
子ども教育学科	8 人
教養教職センター	1 人
宮崎キャンパス事務局	3 人
都城キャンパス事務部	3 人
計	37 人

以下の FD 研修会に関連する資料を参照ください。

- [添付資料](#)
- [・研修会ポスターと研修プログラム](#)
- [・事前アンケート集計結果](#)
- [・研修会資料その 1・その 2](#)
- [・ブレインストーミング実施結果](#)
- [・研修会の様子（「学園通信」記事）](#)
- [・事後アンケート集計結果](#)

◆ 新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査

平成 24 年度からの新規事業として「新入生魅力度調査・卒業生満足度調査」を実施した。
なお、平成 27 年度より、卒業生満足度調査を卒業予定者満足度調査と呼び方を変更した。

今年度は、平成 24 年度以降に行った「新入生魅力度調査」及び「卒業生満足度調査」のうち、平成 24 年度および平成 25 年度の新入生魅力度調査を実施した学生について、卒業時に実施した平成 27 年度および平成 28 年度卒業予定者満足度調査の結果と合わせ、2 年度分のデータを活用し、入学時の魅力度と卒業時の満足度のギャップを集約・整理した。その結果をもとに全学および各学科において、特に満足度評価が有意に下がっている項目について、今後の対策を検討してもらった。また他項目についても検討をお願いした。

平成 29 年度新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査の実施要領

【目的】

本調査は、魅力ある大学づくりのための情報を収集するために実施されている。新入生対象の調査では、本学のどのような点に魅力を感じてくるのか、また、卒業生対象の調査では、本学のどのような点に満足を感じ（あるいは不満を感じ）卒業して行くかをアンケートにより調査する。本アンケートの結果は、各学科における教育活動及び研究活動のみならず広報活動にも利用でき、また学園の運営の方向性をしめすための参考にもなる。

【集計作業】

- ・集計は外部に委託する。
- ・授業評価アンケート同様学科別の集計結果を出す。学科会議等で結果を分析し、結果から見えてく課題を抽出し、課題の改善策を検討する。
- ・4 年後には魅力度と満足度のギャップを集計し、上記同様に学科単位で問題点抽出と課題解決策を検討する。

平成 29 年度新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査結果については、以下をご参照ください。

添付資料 平成 29 年度新入生魅力度調査・卒業予定者満足度調査

◆ 学科・センター独自の FD 活動

各学科における「独自の FD 活動」について報告する。各学科で質の高い FD 推進活動を独自に行っている。

【 環境園芸学科 】

1. 保護者懇談会の開催

保護者（全学年）から学科および都城事務部に対する意見を頂く場として、年 1 回保護者懇談会を開催している。今年度は 12 月 2 日（土）に開催し、まずは教員ならびに学科の活動紹介等を行った。その後、本学の就職課より就職活動の説明を行い、また、4 年生の就職内定者より就職体験談について講話を行った。最近の就職の動向やこれからのスケジュール等の説明があり、保護者から大変役に立ち、有意義であったと概ね好評であった。

また、全体での懇談会后、個人面談を希望する保護者に対しては、1・2 年生は学年担当、3・4 年生は研究室指導教員等が個別に面談し質問・意見に対応した。

2. 学生指導について

環境園芸学科の在学生の出身地は全国にわたり、一人暮らしをしている学生も少なくないため、日頃よりきめ細やかな対応を心掛けている。本学科では、学生の学習や進路、日常生活等の相談に応じるために、各学年担当の教員を配置している。学年持ち上がり方式をとっており、入学から、通常 3 年生後期に研究室に所属となり指導教員の元に学習活動を開始するまでの 2 年半の間、同じ教員が学生の諸問題に対応している。

1) 1 年生への指導

担当教員 5 人と、学生支援課、学生相談室、保健室等の教職員を交えて、1 年生全体の状況を把握するために月 1 回の定例ミーティングを行っている。必修授業の連続欠席、体調不良、GPA 低ポイント、悩みを抱える学生を早期に把握するとともに、指導方法とその対応策を協議し実行した。また適時、定例学科会議で報告して学生情報を共有し、学科教員への協力を依頼した。

保護者に、班ごとの担当教員、学科長、学生支援課、保健室、女子対応教員等の連絡先（メールアドレス、電話番号）を文書で連絡した。オリエンテーション時に、各班約 5～7 人程度ずつで集合写真を撮影し、顔と名前が一致するような資料を作成した。欠席がちな学生については、身体的、精神的、家庭的にどのような特徴があるかを把握し、授業への参加を促す連絡を行ったり、保護者に連絡をしたり、機会があればできるだけ本人に話しかけるようにした。当該年次の学生は、予定通り、休学等の一部学生を除いて来年度初めに所属する分野が決まった。

2) 2 年生への指導

担任教員 5 人と、学生支援課、学生相談室を交えて計 6 回（4/14、6/27、10/10、11/7、12/5、3/2）の担当者会議を開催した。これら会議の開催日程は、学生の成績が出さそう時期や休み明けなどの重要な時期を選定し、学生の状況が把握できるとともに指導の効果が高い日程を考慮した。審議内容は、従来通りの学業不振や悩みを抱える学生を早期に見つけるとともに、指導方法を協議して適宜対応策を講じることに加えて、当該年度の学生については、初めて導入された GPA 制度にもとづく成績不振者への学修指

導を行った。学生便覧による規定に従った GPA が 1.0 未満の学生への学修指導に加えて、修得単位数の少ない学生（学生支援課基準 50 単位以下）、GPA が 1.5 未満の学生にも指導を行うこととした。ただし、退学予定者、休学中、授業料未納による保留者には指導を行わないこととした。また、7月4日には「専攻選定説明会」を開催し、専攻への配属を行った。そして、必要に応じて学科会議で報告することにより情報の共有化を図った。

3) 3年生への指導

環境園芸学科では、3年生後期からは原則として全ての学生が研究室に配属されることとなっている。配属学生数の上限を年度ごとに設定し、少人数による教育体制の堅持と研究室の担当教員の負担の偏りを無くす配慮を行っている。配属先の研究室では各教員が専攻演習や研究室の活動を通し、専門分野の教育・研究指導のほか、履修・進路指導も行っている。配属作業においては、学生の希望を調査し、希望研究室が極力反映されるように配慮している。

休学等の事情により研究室へ未配属の学生に対しては、3年生担当教員が中心になり指導を行うとともに、次年度の研究室配属に向け2年生担当教員と情報の共有を図っている。休学中の学生については学生本人あるいは保護者と必要に応じて連絡を取り合っている。

4) 4年生への指導

上述したような学科の方針に基づき、学生は3年生後期から研究室配属され、4年生の指導は引き続き配属先研究室の教員が中心となり行っている。必修科目である専攻演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲや卒業論文を通し、教育・研究、さらには進路についても少人数あるいは個別指導を行っている。また、必要に応じ、保護者との連絡、学科での情報の共有を図っている。

3. 卒業論文概要集の作成

卒業論文で取り組んだ研究内容の要旨を取り纏めた卒業論文概要集（190ページ）を作成した。今年で6回目となった。作成した本概要集の配布は、卒業生・研究室ならびに企画広報課にも配布した。本概要集については、4年生にとって卒業論文の内容の整理・まとめ、さらなる理解に繋がったものと考えられる。

また、研究室配属3年生にとっては4年生の卒業論文や概要とその作成の取り組み姿勢に接することができたことは、今後の自分の取り組みや研究内容の理解に大いに役立つと期待される。

4. オープンキャンパスの開催

環境園芸学科では毎年度、夏と春にオープンキャンパスを開催している。学科の全教員が参加することを基本とし、パネルやポスターの展示、実験や実習のデモンストレーション等を活用して、学科の紹介、特に研究室の紹介を行なっている。

今年度の夏と春のオープンキャンパスでは、5階から8階の各研究室を開放し、各教員が研究室所属学生の協力も得ながら研究内容の紹介を行った。また、夏のオープンキャンパスにおいては5名の教員による模擬授業も行われた。

学友会の学生も学科・キャンパスの生徒・保護者への説明に加わり、参加者からは大学・学科についてわかりやすかったとの好評が得られた。

5. 「国際交流」の実施

教員の国際的視野を広め、専門分野における知識や技術をより深化させるため、また本学科がこれまで行ってきた上海交通大学農業・生物学院と南九州大学との学校間協定書に基づく交流事業の一環として、昨年度に引き続き、交際交流を実施した。

今年度は昨年度より交流対象校と範囲を広めた。交流対象校に江蘇農林職業技術学院を加え、当校が計画している江蘇省の農村開発モデル事業研究に、本学科が参加することにした。

参加した本学科の教職員は教員3名、技能職員2名であり、期間は3月19日から24日までの5泊6日の日程であった。

6. 学生の資格取得支援

1) 園芸系

(1) 毒物劇物取扱責任者

当該資格の説明会と受験講習会を隔年ごとに開催している。(昨年度は、説明会を行い、宮崎県の試験日程・会場等の情報を周知(就職課及び学生支援課と協働)するとともに教本や過去問題等の資料を提供)

(2) 土壌医検定

土壌医の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

(3) 日本農業技術検定

本検定のうち2級および1級試験において、受験希望者に対して試験情報の提供、ならびに講習会等を実施している。また、講習会では過去問題等の資料を提供している。

2) 造園系

以下のような特別教育、講習および講義を行なった。

- (1) 小型車両系建設機械特別教育を実施
- (2) チェーンソー(伐木)特別教育の実施
- (3) 刈払機安全教育の実施
- (4) 玉掛け技能講習の実施
- (5) 造園技能士実技対策講習会の開催
- (6) 造園技能士学科試験対策講習会の開催
- (7) 造園技能士要素試験対策講座の開催
- (8) 建築CAD検定の開催

また、造園系では学外における各種造園活動も授業と連携させて積極的に行なった。その内容は下記の通りである。

- (9) 幼児教育施設等における屋外教育施設の整備計画への協力
- (10) 地方都市の中心市街地活性化に伴う市民広場整備計画への協力
- (11) 工場緑化における自然教育を視野に入れた環境整備計画への協力
- (12) 都城市内の河川環境整備計画への協力

3) 自然環境系

(1) 自然再生士補

自然再生士補の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行った。

(2) 生物分類技能検定

生物分類技能検定の資格について、教育・研究・就職支援の一環としてその内容や受験について学生に情報提供を行うと同時に、直前に試験対策講座（2回）を開催した。

7. オフィスアワー

学生の学業や学生生活について、質問や相談に応じるための時間としてオフィスアワーを各教員が最低週一回カリキュラムとは別に設けている。原則として、オフィスアワー時間帯には教員が研究室に在室することとし、学生の指導にあたっている。

【 管理栄養学科 】

1. 全学的 FD 活動への積極的な参加

全学的 FD 活動である、各種事業に学科全教員がそれぞれ関係する事業へ参加した。それぞれの事業に参加することで、教育力向上、地域貢献などを目指すことができた。

2. 学科独自の委員会の設置

管理栄養学科では、全学的な委員会とは別に学科独自の委員会を設置し、活動を行ってきている。独自の委員会は、管理栄養士国家試験に関して対策の立案等を主な業務にする「国試対策委員会」、学生の就職支援等を主な業務にする「就職担当委員会」、高度な技能をもつ管理栄養士の養成ができるようカリキュラムの検討等を主な業務にする「カリキュラム検討委員会」の3委員会がある。これらの委員会がそれぞれの業務を円滑に進めることにより、学生の国家試験の高合格率、学生の就職の高内定率、高度な技能をもつ管理栄養士の排出を実現している。

3. 学科全教員で参画する管理栄養士国家試験対策

管理栄養学科の大きな教育目標として、「管理栄養士国家試験の全員合格」というものを掲げている。その大きな目標の実現に向け、学科全教員が学生たちの国家試験対策の支援を行ってきている。上記2の国試対策委員会が立案した国試対策方針を基に、教員は国試対策授業を行い、助手は勉強会の実施などを行ってきている。特に4年生になってからは各研究室の担当教員によるサポートを充実させている。これまでの組織的な取り組みの成果もあり、平成27年5月発表の国家試験の結果(9期生)は100%、平成28年5月発表の国家試験の結果(10期生)は93.3%、平成29年5月発表の国家試験の結果(11期生)は100%と全国でもトップレベルの合格率を出している。即戦力のある高度な技能をもった管理栄養士の養成とともに、管理栄養士国家試験を突破できる人材をこれからも養成していく。

4. 学生の名前と顔を覚える事業

管理栄養学科では、新入生オリエンテーションの時に顔写真をとり、それをもとに顔写真と氏名の書かれた資料を作成し、学科全教員へ配布するようにしている。また、学籍カードも作成している。そうすることで、

学生一人ひとりの名前と顔を覚えることができるとともに、学生指導・支援の推進に役立っている。

5. 学生指導

管理栄養学科は1学年2クラス制となっているため、担任を各クラス1名ずつ計2名配置し、細やかな指導を行っている。授業への欠席が続いた学生やレポートが未提出になっている学生に対しては、早い段階で担任に連絡を取り、対応することで、長期欠席や単位未修得につながらないようにしている。また、学業への不安などがある場合は、解決策を一緒に考え、学業に専念できるよう支援を行っている。

6. リメディアル教育の推進

管理栄養学科の推薦入学等で早期に合格した入学予定者を対象に学科独自のリメディアル教育を推進してきている。入学予定者のうち、文系、理系出身者問わず、高校「基礎化学・化学」および「基礎生物・生物」レベルの基礎的な課題10問ほどを出し、決められた期日までに提出させている。栄養学を学ぶにあたり、化学および生物は大変重要な基礎的科目であり、このような課題を出すことで、入学前の学力向上に努めてきている。

7. 基礎的科目(化学・生物)の支援

管理栄養学科では上記6.の事業とは別に入学後の基礎的科目(化学・生物)の支援も学科独自で行ってきている。1年次配当科目である「からだと栄養実験」にて、高校の基礎化学・化学および基礎生物・生物に関する確認テストを実施し、当該科目が苦手な学生の抽出作業を行っている。当該科目が苦手な学生に対しては、個別に対応するなどして、学科の授業についていけるよう支援してきている。

8. 食農教育

管理栄養学科では、「食農教育」ができる人材を育成しようと、2006年より長年にわたり、地域青年部の方々のご協力のもと農作物を育て、収穫することで農業を知るとともに感謝の心を学ぶ活動を行っている。また宮崎県で収穫される作物を使ってレシピを考案し、発表会を行ったり、地域のイベントでの販売などに参加し、学生にとって大変貴重な体験となっている。全学年を対象に4月に参加者を募り、希望者がこの活動に参加できる体制をとっている。

【 食品開発科学科 】

1. 入学前教育(リメディアル教育)の実施

入学予定の新生が、入学後に学習をスムーズに開始できるようにすることを目的として、入学手続き者を対象に、生物・化学・数学・食品学・食品科学英語の分野に関する課題に解答後、提出してもらいリメディアル教育を学科全教員が実施している。提出された解答については、学科教員がコメントを添えて各自に返却している。

2. カリキュラムの検討

学科教育の根幹をなすカリキュラムの見直しは年間を通じて適宜行っている。特に、専門科目の配当年次や開講科目の検討については十分な時間をかけて行っている。食品開発科学科の名称にふさわしいように、食品開発関連の実習授業を充実させることで実学教育の強化を実施した。来年度に向けて一部の科目の開講年次または開講期を変更し、より効果的な学習が可能となるように変更を加えた。

3. 学年別ガイダンスの強化

各学年での大学生活や卒業後の職業生活への展望を明確に持たせるために、前期・後期の開始時に学年別ガイダンスを実施している。これにより、各自で履修状況や資格取得などに関する意識付けを行うことを可能にし、より有意義な大学生活を送ることができるようにしている。

4. 怠学者および成績不良者に対する緻密な指導

授業出欠管理の徹底と教員間における情報の共有により、問題を有する学生に対して、指導教員を中心にきめ細かな指導を実施している。

5. レポート作成支援の為の「レポート工房」の運営

実験授業等で提出が必要なレポート作成に対して、「レポート工房」に設置したパソコンを用いて、1年次の食品基礎実験、食品微生物学実験などの授業において、作図や表計算プログラムの効率的な使用方法を指導している。パソコンとプリンタの導入台数は毎年増やしているため、学生の利便性も更に増し、使用頻度は着実に増加している。29年度は、Windows 3台、Mac 3台のパソコンを設置した。インターネットには繋がっていないが、実験実習授業のレポート作成や発表用の資料作成のために活用している。これまでに化学構造式を描く際に有用なソフトウェア”ChemDraw”及び描画ソフトの”Illustrator”を導入し、実験レポートのレベル向上に一役買っている。また29年度は新たに、大半の学生が所有するiPhoneで撮影したデータを、Air Dropなどを使って共有することも可能になった。この「レポート工房」の使用に当たっては学生の自主性を尊重しているが、使用時間帯を定めていること、使用簿に記録する等の一定の規則を決めて運用している。

6. 授業改善の為の設備充実

アクティブラーニングを推進するべくiPadの導入を実施した。これにより、授業の理解や学修意欲だけでなく、調べ学修における検索キーワードの選択能力アップ、グループディスカッションなどを通して身につけたスキルは就職活動や社会人でも役立つと考えられる。

7. 3年前期からの研究室配属

早期に研究室へ配属させることにより、専攻生への手厚い指導・支援を可能にしている。また、研究室の大学院生や4年生のアドバイスを得ながら、2年間じっくりと高度な専門的知識・技術を習得できることも利点である。

8. 資格取得・就職支援の充実

食品開発科学科はフードスペシャリストと健康食品管理士の養成校認定を受けている。「応用食品学演習」においては、上記の資格を含む各種資格取得に繋がる教育を実施している。また、例年11月から12

月にかけて実施される認定試験に向けて、後期授業の開始とともに受験希望者に対してカリキュラム時間外での受験対策講座を実施している。就職支援に関しては、1年前期に「キャリア入門」を開講するとともに、3年後期に「キャリアフォーメーション」を3年生全員の出席を前提とした授業として開講し、就職課と連携して学生のキャリア形成と就職支援を実施している。

9. 高校・農業大学校との連携

前年度に引き続き、宮崎農業高校との連携を積極的に行い、相互の教育に係る連携・交流を通して、学生の視野を広げ、教育の活性化を図っている。今年度は、南九州大学において、宮崎農業高校食品工学科が試作したドリンクタイプゼリーの試食会と体験入学（シュークリーム作り）を実施した。また、日南振徳高校とは、今年度から新たな形での連携を結び、2回に渡って主に食品加工に関する出前講義を実施した。そして、6月と7月の計5回にわたり、宮崎南高校の生徒たちが、本学宮崎キャンパスにおいて「加工食品の製造と分析」というテーマで研修を実施した。さらに、宮崎県立農業大学校と包括的連携協定を締結し、連携活動の一環として、農業大学校フードビジネス専攻の正課必修授業を本学宮崎キャンパスで実施した。他にも、日南学園高校の生徒による六次産業化プロジェクトを支援し、チョウザメを素材として廃棄物を残さない完全活用を目標とした商品開発について検討を続けている。

10. 企業との連携

6月15日（木）に、食品開発科学科3年生対象の「食品開発実習Ⅱ」の授業として、有限会社らいふのぱんから特別講師を招聘し、「ドイツのソーセージ作り」を実施した。今後、当学科の学生たちが食品開発分野の学びや実習を行っていく上で参考となる、大変有意義な講義となった。また、11月28日（火）には、2年生対象の「食品開発実習Ⅰ」の特別講師による授業のひとつとして、延岡虎屋の上田耕市社長の和菓子づくりについての講義と、菓子職人の三輪健二さんの指導による和菓子作り（ねりきり）の実習を行った。受講生達は、大変興味を持って、カラフルな和菓子作りを行った。学生たちの食品開発への意欲や地域食品産業への関心を高める良い機会となった。

食品開発科学科3年生は、8月から9月にかけて、夏季集中講義の実学教育の一環として、宮崎県食品開発センター（5名が受講）、延岡市の佐藤焼酎製造場（3名が受講）、有限会社薩摩蒸気屋（1名が受講）において、食品製造学外実習を行った。参加した学生にとって、通常の授業等では経験できない現場での貴重な体験をする機会となった。食品開発科学科2、3年生対象の「食品開発実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」の授業や卒業論文研究として、綾町の香月ワインズ（ワイン）、田野町（機能性茶）、高千穂町（米粉の加工）、洋菓子店（へべすケーキ等）と学生も交えて共同開発を行い、学生が6次産業化や地域食品開発、地域ニーズ等を理解するのに役立てた。

11. 各種地域イベントへの積極的な参加

地域における食品開発の学科としての存在感を高めるために、健康ふくしまつり、みやざきテクノフェアなどの地域イベントに参加した。展示ブースには中学生や高校生をはじめとする多数の見学者が詰めかけた。食品開発科学科の教育・研究内容のパネル展示による紹介、学科の学生によるパンフレット配布や来訪者への南九州大学の紹介を行い、お子様から中・高校生、企業担当者、一般参加者まで、幅広い年齢層の地域住民の皆様に理解していただくことができた。健康ふくしまつりでは、教職課程の学

生が中心となって模擬授業を行い、小学生を含めた家族連れが参加し、子供たちの関心も深めることができた。今後社会人となる当学科の学生たちにとっては大変貴重な機会となった。

12. 学科主催卒業祝賀会の実施

卒業生の門出を学科教員で祝福することを趣旨とする学科主催の卒業祝賀会を卒業式の終了後に実施している。卒業生による思い出や感謝の気持ちを表明する機会となり、学科教員からのひとことや保護者代表による挨拶および在学生代表からの贈る言葉など、卒業式の厳粛な雰囲気とは異なるアットホームな雰囲気で卒業生を送り出すイベントとして、学科では定着している。

13. 学年を超えた学生同士の交流促進

学科内で学生同士の学年を超えた交流を促進する各種交流イベントを実施しているが、今年度は、バレーボール大会を開催した。各学年が試合を楽しみながら、試合の合間に自己紹介などをして親睦を深めた。

14. きりしま祭で学生が模擬授業を実施

前年に続き、きりしま祭で教職課程の学生が中心となって模擬授業を行った。小学生を含めた家族連れが参加し、子供たちの関心も深めることができた。

15. 「食事体験実習」をフレッシュマンアワー授業として実施

平成 29 年 6 月 12 日（月）に食品開発科学科 1 年生対象のフレッシュマンアワー授業の一環として、フェニックス・シーガイア・リゾートにおいて食事体験実習を行った。この実習の目的は、テーブルマナー講習を受講しながら、地元産の食材に触れ、食の素晴らしさと有り難みを体感することで、学生たちはシーガイアの専門スタッフより、接客する際のポイントを聴いた後、コース料理（フレンチコース）を一品ずつ配膳され、料理担当スタッフの方から食材などについて説明を受けた。接遇マナー講習、テーブルマナー講習、食材に関する講習など食品開発科学科の学生として是非身につけてほしい講習内容であった。

16. 平成 28 年度公募による卒業研究テーマ成果発表会への参加

高等教育コンソーシアム宮崎主催の上記の発表会への学生の参加を学科で勧めており、今年度は食品開発科学科から 1 研究室が口頭発表、1 研究室がポスター発表に挑んだ。残念ながら入賞は逃したが、学生たちにとって、他大学の学生のレベルを知る良い機会となり、今後の勉学にとって良い刺激となったと思われた。

17. 留学生のインターンシップサポート

食品開発科学科には、平成 27 年度に 1 名、平成 28 年度に 2 名、平成 29 年度に 1 名のベトナムからの留学生が入学し、平成 30 年度においても 1 名の留学生が入学予定である。学科として教員による留学生の支援体制を確立するとともに、日本人学生によるサポートも必要不可欠であることから、学生を交えた留学生受入体制をこれまでに整備し実行してきた。

平成 29 年 8 月に佐藤焼酎製造場株式会社（延岡市）において留学生の 3 年生 1 名が、焼酎製造の研修（製

麴、焼酎製造、検品など）を行った。この学生は、いも焼酎造りに大変興味を持っており、ベトナムのナムディン省の農政担当者からも期待されている。卒業後は県内の焼酎会社で数年間働き、その技術をベトナムに広げたいという夢を持っている。

18. スチューデント・アシスタント (SA)制度の整備

学長裁量費による教育改革案として SA 制度の導入案が採択され、一部の学生を SA に任命し、授業補助 SA（実験・実習授業の準備・後片付けの補助作業の実施，授業中のごく簡単なアドバイス等）と留学生補助 SA（留学生の学習・日本語補助）を実施した。SA を担当する学生と補助を受ける学生の双方にとって大きな波及効果を与えている。

19. ラーニングコモンズによる学習支援の試行

本館 5 階食品開発科学科事務室前の廊下スペースに、高鍋キャンパス廃棄備品の机・椅子を設置した。授業時間外に勉強している学生グループから、近くを通る教員に自由に話しかけてもらったり教えてもらうなどができて、教室とは異なる自由な場所づくりを行っている。

【子ども教育学科】

1. 学科内 FD 研修会の実施

学科内 FD 研修会を 12 月 4 日（月）15：00～17：00 の日程で、子どもの学び研究所において実施した。子ども教育学科が開設された当初の教員が退職し、新しい教員が多くなっていることから、今年度は元人間発達学部長の黒木哲徳氏から学部・学科の設立の経緯とその背景について話を聞き、設立の趣旨について教員の共通理解を図ることから始めた。開設にあたって多くの解決を求められる課題の中で現在の子ども教育学科のカリキュラムや教育体制ができあがったことがわかり、今後の学部・学科について考えるうえで有意義であった。

その後、SWOT 分析を基にして現在の子ども教育学科の課題と今後どのように対応していくのかについて検討を行った。

2. 「子どもの学び研究所」「子育て支援センター」「子育てひろば（みなみん）」「環境教育センター」の活動について

学部附属の「子どもの学び研究所」、「子育て支援センター」、「子育てひろば（みなみん）」、「環境教育センター」では、現場教師との共同研究や、地域の親子への子育て支援活動、更に学生も参加しての研究活動などそれぞれにおいて柱となる活動が展開されている。2017 年度の活動内容の詳細は『南九州大学人間発達研究』第 8 巻に報告されているが、どの活動も大学教員としての教育力量を向上させることに、直接的、間接的に貢献するものである。

3. 学生への支援について

①担任制による学生への目配りと支援

1・2・3・4 年生混合グループを編制してホームを作り、各教員がホーム担任となって、学生への相談・助言・ケアなどを行っている。

②履修計画に関するきめ細かい指導

保育士資格・幼稚園教諭免許・小学校教諭免許の3資格免許、2013年度入学生からは特別支援学校教諭免許を加えた資格免許を、どういう組み合わせでどう取得するかについての履修計画づくりへの指導・支援を、特に1・2年生段階で丁寧に実施している。

③キャリア教育としての課外授業「夢を叶える塾」

課外授業として、小学校・幼稚園・保育園の先生として必要な資質・能力を高めることを目的に、1年生対象の「夢を叶える塾Ⅰ」、2・3年生対象の「夢を叶える塾Ⅱ」を通年で毎週開催している。「夢かなⅠ」では県内外で活躍されている方による「講話」等、「夢かなⅡ」では小学校志望者には採用試験対策講座、保育者志望者には手遊びや手作り人形、パネルシアター・ペープサートによる劇づくり等を行っている。学年末にはパネルシアターやペープサート劇の発表会を「夢かな劇場」として開催した。また6月には二本松はじめ氏を招いて「つながりあそび・うた」のワークショップを全学年参加のもと実施した。

④3・4年生の教育・保育実習の指導・支援

小学校・幼稚園の教育実習、保育所・児童施設の保育実習に3年生・4年生を送りだした。小学校教育実習では、周到的な事前指導が実施され、実習校からは実習生への高い評価を得ている。学生たちは実習を通して大きな達成感を得ることができ、大学での授業に向かう姿勢等に良好な変化がみられている。

⑤学科教員全体での学生に関する情報の共有と支援

学科会議において、「気になる」学生に関しての情報交換・共有に努め、教員全体で支援を行っている。なお、「学生支援連絡会」において、学生部教員を含む複数の教員、保健室、学生相談室、学生支援課で気がかりな学生についての情報交換会を行っている。ここでの学科教員全体で共有した方がよい情報については、その後、学科会議で共有し、学生支援に役立てている。

【 教養・教職センター 】

FD報告作成をフリーソフト(emacsとR言語など)による「再現可能な研究」(Reproducible Research)と情報デザイン(Edward Tufte's Information Design)技術を磨く機会にし続けている。授業評価アンケート結果が数値化・視覚化されており、深く考える機会になる。

センター会議でFD委員会の活動と課題の話をしている。アンケート結果の解釈や具体的な教授法について、よく話題になる。毎年「私は授業内容について質問や発言をした」は「多少そう思う」と「特にそう思う」回答が少ない。学生はどんな風に「発言」を解釈しているかセンター会議で話題になる。今年度は、能動的な授業やアクィブラーニングを考えるのに役立つFD講演会があった。残念ながら、センターのFD委員以外のセンター教員が参加しなかった。今後も「開発教育協会」の参加型研修があれば助かるだろう。一回では参加型学習の理念と工夫を身につかないし、継続は力なりと思って続けたい

と考えている。

参考資料：

「McKeachie's Teaching Tips: Strategies, Research, and Theory for College and University Teachers」(2014)に書いてあるようにFD研修の効果が教職員同士の交流で見られる。何回かファシリテーターを体験しながら、ファシリテーターの技術を身につくだけでなく、教員が教えかたについての対話が増える。

Most professionals in teaching improvement will tell you that the typical comment on feedback sheets is: "The best thing about the workshop was getting ideas from faculty members in other fields who have similar interests and problems." p. 333

【 大学院 】

1) 教育・研究用機器の購入

- ①振盪培養器、5月に都城キャンパス本館7F設置済、使用中；
- ②分光光度計、9月に都城キャンパス本館8F設置済、使用中。

2) 大学院修了生の体験講演会について

①園芸学専攻修了生体験講演会

開催日時：平成30年1月16日（火）12:20～13:00

場所：都城キャンパス多目的室(宮崎キャンパスとのTV会議形式)

講師：南九州大学都城事務部FC課 技能職員 「平成22年度修了生（園芸昆虫学研究室）」

演題：「南九州大学大学院と昆虫研究と仕事」

対象者：大学院担当教員、教職員、院生、学部生（1～4年生）

参加者は以下の通りです。教職員は25人、学生27人、合計52人

②食品科学専攻修了生による講演会

日時：平成30年2月16日（金）13:30～14:40

場所：宮崎キャンパス会議室

都城キャンパス多目的会議室

（テレビ会議システムを使用して開催）

講師：株式会社 朝日サイエンス 荒武 慧（あらたけ さとし）氏

（平成24年度修了生）

内容：「大学院生活を経て～経験は財産～」

対象者：大学院担当教員、教職員、院生、学部生（1～4年生）

参加者は以下の通りです。教職員は11人、学生65人、合計76人

3) 大学院研究科招へい講演会の開催

- ① 北京大学教授、東京大学客員教授 邱 国玉博士による講演（南九州大学創立 50 周年記念講演を冠とした）

日時：平成29年9月27日（水） 16:30～18:00

場所：南九州大学 都城キャンパス（都城市立野町3764番地2）（都城キャンパス多目的会議室と宮崎キャンパス会議室をテレビ会議方式で繋がります）

講師：北京大学教授、東京大学客員教授 邱 国玉博士

講演内容：「中国の大学院教育と中国の水エネルギー研究」（仮）

対象者：南九州大学大学院担当教員および職員，大学院生，学部生（1～4年生）

参加者は以下の通りです。教職員、学生を合わせて237名。

- ②九州大学大学院松井教授による講演

日時：平成30年1月25日（木） 16:30～18:00

場所：宮崎キャンパス 1217 教室（2階大講義室）

都城キャンパス 3201 教室（3号館大講義室）

（テレビ会議システムを使用して開催）

講師：国立大学法人 九州大学大学院 農学研究院

生命機能科学部門 食料化学工学講座（食品分析学）

松井 利郎 教授

内容：「吸収・加齢からペプチド機能を考える」

対象者：南九州大学大学院担当教員，大学院生，大学教員および職員，学部生（1～4年生）

参加者は以下の通りです。

教職員：23名；大学院生：3名；学部学生：205名；合計：231名

- ③農研機構野菜花き研究部門企画連携室長 石田正彦博士による講演

日時：平成30年2月5日（月） 16:30～18:00

場所：南九州大学 都城キャンパス（都城市立野町3764番地1）

（都城キャンパス多目的会議室と宮崎キャンパス会議室をテレビ会議方式で繋がります）

講師：農研機構野菜花き研究部門企画連携室長 石田正彦博士

講演内容：「野菜花き研究のフロンティア、農研機構の役割～世界に先駆けて開発したダイコンを一例に～」

対象者：南九州大学大学院担当教員，大学院生，大学教員および職員，学部生（1～4年生）

参加者は以下の通りです。

教職員：16名；大学院生：5名；学部学生：131名；合計：152名

4) 大学院研究科掲示板の設置

宮崎キャンパスと都城キャンパスに大学院研究科掲示板を設置し、大学院生への情報伝達の利便性の向上を図っている。

◆ 新たな取り組み

平成 30 年度は、これまで構築してきた FD 推進活動を更に向上させ充実した FD 推進活動へと発展させていく。また、SD 推進会議の組織下における活動の充実と、関連する取組みに積極的に参画していく。

FD 推進委員会が平成 30 年度に実施する事業は以下の通りである。

- 事業 1 授業評価アンケートの実施（前期・後期）
- 事業 2 FD 講演会の実施（年 1 回秋に実施）
- 事業 3 新入生魅力度調査及び卒業予定者満足度調査の実施と結果の活用
（前期:新入生対象、後期:卒業予定者対象）
- 事業 4 授業参観の実施（後期）：実施方法の検討を含む
- 事業 5 各学科独自の FD 活動の実施
- 事業 6 FD 活動の情報収集
- 事業 7 SD 推進会議が担う活動への参画

◆ FD 活動の反省と今後の活動

【 環境園芸学科 】

新入生魅力度調査では学生の生活環境、サークル活動を行う上での環境について十分な魅力を得ていないとの結果が得られた。これらは全学的な問題であり、関係部署と連携をしながら対応を考えなければならない。しかしながら、全体としては、調査した各設問に対して、あまりあるいは全く魅力を感じないとの回答は概ね 1 割未満であり、本学並びに本学科の教育研究、就職支援、学習・生活支援および施設・設備は新入生の多くに魅力あるものになっていることが示された。この高い魅力度を高い満足度に維持・向上に繋げる取り組みが重要であると思われる。また、新入生（高校生）のニーズは変化するものと考えられることから、今後、時代に即した対応や本学の特色や魅力度をさらに高める取り組みも必要であると考えられる。

卒業生満足度調査においては、「インターネット環境の充実」や「運動施設やサークル活動の支援施設の充実」については、本年度のみでなく例年満足度が低いことから、Wi-Fi 環境の充実や運動施設・サークル活動のハード面での整備充実などの全学的な検討が必要である。その一方で、「研究・実習用の設備・環境」と「快適な校舎」については高評価であるが、本学の特徴としてさらなる充実を図っていく必要がある。また、学生の専門科目に対する高い関心が認められるが、一方で教養教育科目に対する魅力度・満足度が低いことが示されている。学生への教養科目の重要性の理解や教養科目の在り方、教養と専門のバランス（専門の特化も含め）等について検討が課題として考えられる。これらの結果は大学としての根幹に関わることであり、大学あるいは学科として早急な結果の分析とその対応が必要である。特に教養教職センターとの連携を深め、科目の選定や配置について熟考しなければならない。

授業評価アンケートの結果に関しては、これまでの授業評価結果をもとに各教員は各設問項目を中心に改善の努力を行っており、各項目における年次の増減は多少あるものの、着実に成果があらわれてきている。今後は、特に学生自信の授業に対する積極的な取り組みを向上させることが総合評価の改善に結びつくと考えられる。引き続き、各教員および学科の地道な改善努力の継続が重要であると考えられる。参観授業については、開催数は 3 授業、参加者 7 名であった。参加人数が少ない要因としては、各教員が諸業務により忙しく参加する余裕がないことが原因と考えられる。しかしながら、参観授業の参加者からは有意義な刺激を受けたとの印象が伝えられていることから、なお一層の参加促進を訴えていく必要がある。

今後の FD 活動の在り方として、これらの活動が形骸化しないよう、FD 活動の意義について各教員個人が、また学科として再認識する必要があり、さらには独自の新しい活動や企画を積極的に考案、実施し、FD 活動を推進させる取り組みが重要であると考えられる。

【 管理栄養学科 】

これまで南九州大学の FD 活動の一環として、新入生および卒業生に対して魅力度および満足度調査を実施してきたが、今年度初めて入学時魅力度調査に回答した学生の卒業時の満足度を対比して結果を分析することができた。

その中で特に管理栄養学科における研究教育面については、「入学時の期待」値を上回っている項目が

複数あり、学生の期待に応えられていることが分かった。

“学生の管理栄養士国家試験合格”という目標に向けての取り組みや管理栄養士という専門職を育成するためのカリキュラムや研究を行うための研究室の設置などが充実している結果であることがうかがえる。

研究教育面以外では、南九州大学FD推進委員会規定にも書かれている通り、社会貢献、管理運営に関することも必要である。今年度も昨年同様、地域連携等における「社会貢献」に関する活動をさらに充実させており、次年度も地域社会との連携活動を強化していく。

また例年同様、管理栄養学科では、厚生労働省(関東厚生局)による監査もある。管理栄養士養成課程で専門基礎科目および専門科目を教授する教員の研究歴が少なければ(毎年一定の研究業績があるかが問われる(過去にたくさんの業績があるのではなく、継続的に研究を行っているかが問われる))、管理栄養士養成施設の専任教員として認められない可能性がある。厚生労働省(関東厚生局)による監査を乗り切るために、各教員の研究推進を図ることが重要であるため、その取り組みとして、研究推進の仕組み・方法についても引き続き検討を重ねていく。

【 食品開発科学科 】

(1) 今年度の反省

今年度は、前期・後期の授業評価アンケートの分析結果として、授業実施方法に関しては、ほぼ前年並みの評価であったが、授業に対する学生側の積極的な取り組みに欠けるという回答が目についた。また、授業の理解度も若干低下してきていることが判明した。

授業参観に関しては、担当教員の参観対象科目を増やすことによって、参観人数を増加させることに成功した。今後も、教員に対して授業参観の意義をより浸透させていくための方策を考えていく必要がある。

学科独自の FD 活動に関しては、従来からの継続事業を中心に、引き続き学生の教育・研究内容の向上に繋がる多種多様な活動を実施することができた。

(2) 次年度以降の FD 活動

授業に関しては、学生がより自主的・積極的に取り組むことに繋がる授業、双方向型の授業が定着しつつあり、今後も積極的に継続していく。

専門教育関連では、食品開発に関する専門知識を実践的により広く、より深く学ぶことができるように、引き続き教育体制の整備を実施していく。具体的には、学生の専門知識・技術の習得に繋がる食品開発実習教育及び醸造実習教育関連の整備の充実をさらに進めていくことにより、実学教育を一段と強化していく。そして、HACCP 管理者などの資格を取得するための「食品安全専門人材育成」に関する教育プログラムの導入を検討する。

また、地域社会との連携活動を段階的に強化して、学生の教育・研究の充実に繋がる産官学金の連携を深めていく。県内実学系高校との連携では、30 年度も引き続き、宮崎農業高校をはじめとする県内の複数の高校と連携活動を実施するが、学生がより積極的に参加できる活動をこれまで以上に増やしていく。

【 子ども教育学科 】

平成29年度は、卒業生70名うち、公立小学校教員・特別支援学校教員及び地方公務員最終試験に合格した者10名を含む、68名全員が就職する結果（就職率100%）となり、就職以外の2名も専門学校への進学を決めるなど、前年度以上の好結果を示すこととなった。

この就職実績が反映されたように、本年度実施した卒業予定者満足度調査の就職支援に対する回答として、「将来の進路に関してのセミナー・ガイダンスや公務員・教員就職のための講座が充実している」、「就職課」があり、当該課の専門スタッフが就職活動支援をしてくれる」が比較的ポイントが高かった。同調査の教育研究に関する回答でも、「4年間の学びを教員がきめ細かにサポートする」、「ホーム制や1年次後期から始まる少人数のゼミ」、「夢を叶える塾での就職試験対策など、手厚い進路サポート」の評価が比較的高く、相乗効果が働いていたものと考えられる。

また、本年度実施した学生授業評価アンケート実施結果が、前期、後期ともに昨年度の結果を上回ったことは大きな成果といえる。昨年度の反省事項を踏まえ、教員各自が授業改善のなかで改めて自身の授業の在り方を振り返り、創意工夫を重ねるとともに、アクティブ・ラーニングを目指した「学び方・教え方」に着目し、思考発信型授業へとイノベーションを起こしつつあるのではないかと考える。

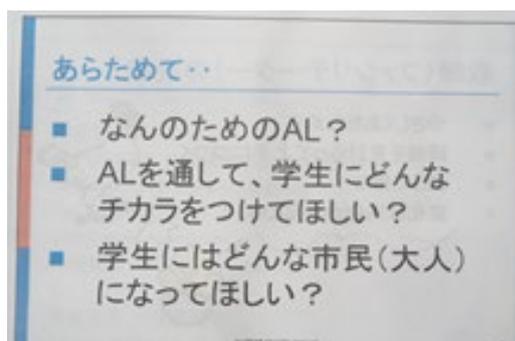
今後の課題として、教員の退職等に伴って、専門分野に応じた新たな教員を迎え入れるなど、学部全体を見据えた教員の配置も含めて、教員相互の研究や教育内容について相互理解が深まるようにFD活動の時間の確保に努めていきたい。さらに、学生の教職志望に応じた学校種等の免許状選択を踏まえて、これまでの教育内容の成果と課題を改めて総括し、カリキュラムの改善等を検討していくなど、授業と教員との横断的な専門性のつながりを追求していきたいと考える。

【 教養・教職センター 】

もっと積極的に大学・教育の使命・目的を話し合えるようにする。それぞれの分野の講義の繋がりに気づいて、大学の勉強の辻褄（一貫性 Coherency）を強化できるといい。授業の内容だけじゃなくて、もっと出欠・席順など授業運営の（フリーソフトによる）工夫を共有できる機会を作るべきだ。

教養・教職センターの授業は何のために「役立つ」とか大学の勉強の辻褄「有機的つながり」（一貫性）を深く考える課題があって話し合うようにできればいい。大きい課題であるけど、センターではそれぞれの専門分野のお互いの関係と人類の中の位置が見えるように努める方法を探れると充実したFD活動に繋がる。授業のアプローチなどについての話し合いを増やす努力をする。

今年のFD講演会の講師 八木亜紀子さんの「アクティブ・ラーニング研修」の資料に今後のFD活動の参考になるスライド（右）があったので紹介したい。



【 大学院 】

平成 28 年 9 月より南九州大学 FD 推進委員会規程の改正に伴い、FD 推進委員会の構成員として組み入れられた。平成 29 年度は、年度最初から FD 推進委員会の構成員として委員を置き、FD 推進活動に積極的に参画してきた。

今年度は、外部講師を招聘した学術講演会を計 3 回実施した。大学院生の研究意欲をさらに刺激する大変有意義な講演会となった。また、多数の学部生も参加し、普段あまり触れることのない分野の講演内容に接することにより視野が広がったものと考えられる。

本学大学院出身の修了生に講演会を依頼し、各キャンパスで 1 回ずつ修了生講演会を実施した。大学院での経験、大学院進学の特長、大学院での研究内容など多岐に渡って話してもらうことにより、学部生に大学院のことを知ってもらう大変良い機会となった。

今後も FD 推進委員会の構成員として委員を置き、FD 推進活動に積極的に参画していきたい。